

「AヲBトV」構文に関する一考察

金賢娥

キーワード：ト、「AヲBトV」、「AヲBダトV」、引用構文、認識動詞構文

1. はじめに

現代日本語には引用構文との関連性でよく取り上げられる次のような構文がある。

- (1)a.先生は太郎が天才(だ)と思っている。 (典型的な引用構文)
b.先生は太郎を天才だと思っている。 (認識動詞構文、判断構文)
c.先生は太郎を天才と思っている。

(1b)は多くの先行研究で(1a)から派生した構文であると主張されている。これは認識動詞のみで現れる現象であるため、仁田(1980)などで「認識動詞構文」と呼ばれている。さらに(1c)は形態・意味的に(1b)によく似ていることから(1b)と同一な構成要素から成り立っていると見なされる場合が多い。本研究では(1b)、(1c)のような構文について、それぞれの構文に現れる「ト」の機能が異なっていることを主張する。

2. 先行研究

本節では「AヲBダトV」構文と「AヲBトV」構文に関する先行研究について批判的検討を行う。阿部(2004)は「AヲBダトV」構文と「AヲBトV」構文が異なる構造を有していると論じ、「AヲBトV」構文と「AヲBクV」構文を並行的に捉えることで、「AヲBダトV」構文との構文的違いを明らかにしようとした。さらに、「AヲBクV」構文との並行性を用い、「AヲBダトV」構文と異なる「AヲBトV」構文の文法的特徴について i)「ト」の前に時制を持たないこと、そして ii)極性、iii)ムードが現れないことをその統語的根拠として提示した。まず、阿部(2004)は「ト」句が時制を持たないことは次の(2)の例をみると分かるとしている。

- (2)a. 太郎は花子がかつて女優だったと思っている(らしい)。
b.*太郎は花子がかつて女優と思っている(らしい)。

次に、「Bト」が極性を持たないことについては、「AヲBトV」構文は時制を除いた状態で否定を表わすことができないため、次のように連用形にして否定辞を伴わせる

方法により極性を持たないという事実を示した。

(3)a.??みんながこれを吉報ではなく思った。

b.??僕はそれを図書館ではなく認識してしまった。

最後に、阿部(2004)は「AヲBダトV」構文と「AヲBトV」構文の構文的違いは「Bト」にムードが生起しない現象からも確認できると述べている。

(4)??皆がこれを吉報かもしれないと思った。

阿部(2004)は以上のような文が言えないため、「AヲBトV」構文には極性とともにもムードが生起しないとしている。

しかし、統語的根拠として挙げられている根拠の全てが「AヲBクV」構文と「AヲBトV」構文を並行的に捉えることから始まっているが、この二つの構文を同じ構造を有するものとして扱っていいのかという疑問が生じる。「AヲBトV」構文の起源を引用構文とし、かつ「AヲBクV」構文と「AヲBトV」構文を同類の構文とすると、以下のように「思う」の代わりに「信じる」などが生起する文においても両者は同じ振る舞いをするはずだが(6)をみるとそうではない。

(5)先生は花子を賢いと信じた。

(6)*先生は花子を賢く信じた。

「AヲBクV」構文は「AヲBトV」構文とは異なり、限定された動詞(主に「思う」、「感じる」など)に現れるため、両者を同一な構造を持つものと並行的に捉え、その根拠を「AヲBトV」に適用するのは無理があるように思われる。つまり、「AヲBトV」構文に生起する動詞が「AヲBクV」には生起できないという現象が数多く存在する限り、両構文を同類の構造を成しているものとするのは妥当ではないということである。

さらに、阿部(2004)は意味面においては、「AヲBトV」構文は「直接性」があるもの、つまり、言語が介在する以前の認識や把握といったものを示す「非言語的認識」を表わす構文であると論じている。また、「AヲBトV」構文に倒置指定文「犯人が太郎だ」を入れると「AヲBダトV」構文に挿入した時よりかなり不自然な表現になる現象を言語を介在するか否かの違いとして挙げている。

(7)a.探偵は犯人を太郎だと思っているらしい。

b.探偵は犯人を太郎と思っているらしい。

(8)a.?僕はあたりの箱を一番右のやつだと思った。

b.??僕はあたりの箱を一番右のやつと思った。

阿部(2004)によると、(7b)が(7a)より不自然に感じられる理由は、倒置指定文は単純に「A=B」という結びつけではなく、「Aなのは何かというとBだ」という一種の疑問文とそれに対する答え - いわば物事を言語化して分析的に見ているという状況であり、言語の介在しない認識を表わすような「AヲBトV」には生起しないという。阿部(2004)は上記の例について「Aヲ」に不特定要素が入りにくい上に、「ト」の問題(言語を介在した認識なのか否か)が重なり「ト」が現れた文が不自然に感じられるのだと述べているが、以下のように「思う」以外の動詞の例をみると、言語の介在の問題や、「ヲ」格の特定要素の問題といった説明を与えるには無理があるように思われる。

(9)a.(?)探偵は犯人ヲ太郎ダト確信した。

b.(?)探偵は犯人ヲ太郎ト確信した。

(10)a.(?)警察は犯人ヲ3番目の容疑者ダト思い込んでいた。

b.(?)警察は犯人ヲ3番目の容疑者ト思い込んでいた。

(9b)と(10b)は(9a)と(10a)に比べ、それほど許容度の違いがないように思える。言語の介在という面から考えても、どちらが言語を介在していないのかを判断するのは容易ではない。また、(9)、(10)の「Aヲ」が不特定要素であっても、両方の構文に許容度の差があまり感じられないということは、「言語の介在」、「不特定要素の有無」は「ダ」の出現の可否を説明するには限界があるようである。

本稿は阿部(2004)の主張、つまり、「AヲBトV」構文は「AヲBダトV」構文とは異なる構文である」ことには賛同する立場だが、その根拠に対しては疑問が残るところがある。本研究ではその点について新しい根拠を提示した上で、「思う」以外の引用動詞を含めた「ダ」が現れない「AヲBトV」構文での「ト」を正しく位置付けることを目指す。

次節ではまず、「AヲBトV」構文を取る動詞について述べ、これらの動詞が「AヲBトV」構文の解釈にどう関わっているかについて検討する。

3. 「AヲBトV」構文をとる動詞

本節ではまず「AヲBトV」構文を取らない「心理・感情動詞」について分析する。さらに「AヲBトV」構文のみを取る動詞の特徴について考察し、それらの動詞の出現が「AヲBトV」構文とどう関わっているかをみる。

3.1 「AヲBダト心理・感情動詞」構文

一見、「思う」などの認識動詞と意味的に密接に関わっているように思われる心理・感情動詞は「AヲBトV」構文に生起しない。ここでもう一つの興味深い現象は心理・感情動詞の場合、「AヲBダトV」構文に比べ、「ダ」が現れない「AヲBトV」構文は非文になることである。

(11)a.母は息子ガ馬鹿ダト心配している。

b.母は息子ヲ馬鹿ダト心配している¹。

c.??母は息子ヲ馬鹿ト心配している。

(12)a.母は息子ガ天才ダト喜んでいる。

b.母は息子ヲ天才ダト喜んでいる。

c.??母は息子ヲ天才ト喜んでいる。

上記のような現象は「Bト」が節を成さないという一つの間接的な根拠になる。以下では、「Bト」とは異なり、「Bダト」がAとは独立した節を持つことを以下の事実を用いて示す。

まず、一つ目の事実として、(11b)、(12b)のように「AヲBダト感情動詞」のBが次のようにAとは異なる独立した主語や節をとることが可能であることが挙げられる。

(13) 母は、登山に行った息子を天候が大荒れだと心配している。

(13)ではBが「天候が大荒れだ」という形の独立した節の形を取っている。つまり、「大荒れだ」の主語は「天候」であり、「Bダト」はAとは独立した節を成していると考えられる。しかし、(11c)、(12c)のように感情動詞の場合「Bト」は生起しない。これは、「Bト」は「Bダト」とは異なり、節を成していない可能性を示唆する。

もう一つの事実は、感情動詞は元々「ト」を除いた「XがAヲV」型で成立する2項動詞であることである。(14)、(15)は「Bダト」がなくても文が成立するため、感情動詞と共起する「Bダト」は独立した節だと考えられる。

(14)母は息子(のこ)を心配した。

(15)母は息子のこを喜んだ²。

¹ (11b)、(12b)で感じられる多少の落ち着きの悪さは次のように「ノコト」を付加することにより解消される。

(11b)母は息子ノコトを馬鹿ダト心配している。

(12b)母は息子ノコトを天才ダト喜んでいる。

このような現象が起こる原因はまだ明らかではないが、これについては今後の課題にしたい。

以上のような事実から次のようなことが言える。つまり、「Bダト」が節を成していて、かつ「Bト」が現れないことは、「Bト」が節ではないと仮定すると、(13)のように独立した節をとることから「心配する・喜ぶ」などの感情動詞は節を要求するため、節ではない「Bト」をとることができないというような説明が可能である。したがって、他の説明が可能でない限り、「Bト」が節ではないと考えるのは妥当ではないかと考えられる。

本節では、「AヲBトV」構文に生起しない感情動詞が表れた「AヲBダト感情動詞」構文の特徴について検討することで、「Bダト」がAとは独立した節を成しており、これはまた「Bト」が節を成していないということに繋がる可能性があるとして論じた。次節では「AヲBトV」構文と「AヲBダトV」構文の文法的特徴を検討することにより、「ダト」と「ト」が異なる存在であることを主張する。そのために、「AヲBトV」構文のみをとる動詞を調べ、「AヲBダトV」構文とは異なる文法的振る舞いについて分析する。

3.2 「AヲBトV」構文のみを取る動詞

本節では「AヲBダトV」構文と「AヲBトV」構文の違いを説明するために「AヲBトV」構文を取る動詞について例と共に示す。

先行研究では「ダト」と「ト」の違いについては明確な説明がされず、「AヲBトV」構文は「AヲBダトV」構文から単に「ダ」の省略した形だとか、意味面において両構文にニュアンスの違いがある(森山(1988))などと述べられている。しかし、認識動詞の中でも「ダ」が現れると「ト」のみが現れる時より許容度が落ちる例が多数存在する。このような現象は「AヲBトV」構文が「AヲBダトV」構文から「ダ」が脱落、または省略されたものと見なすには無理があることを意味する。このような現象について詳しく検討するため、本節では「AヲBトV」構文には生起するが、「AヲBダトV」構文にすると許容度が下がる例を取り上げ、「AヲBダトV」構文とは異なる「AヲBトV」構文の振る舞いについて検討する。検討の対象となる動詞は、引用構文について論じた代表的ないくつかの研究—仁田(1980)、森山(1988)、砂川(1989)、阿部(2004)、小野(2005)—で挙げられた動詞の中でも内的活動を表わす動詞のみ³を対象とする。以下の【表1】に詳細を示す。

² (15)も(11b)、(12b)と同様に「ノコト」を挿入することにより文が自然になるが、これについても更なる考察が必要である。

³ 発話動詞の場合は「AヲBダトV」構文と「AヲBトV」構文の両者が許容されるため、本節の調査対象としない。しかし、発話動詞が「AヲBダトV」に生起する場合と「AヲBトV」構文に生起する場合には、意味の違いが感じられる場合があり、さらなる考察が必要だと思われるが、これについては今後の課題としたい。

【表1】 内的活動動詞⁴のリスト⁵

思う、疑う、後悔する、まよう、分かる、信じる、確信する、決心する、決意する、決める、推量する、認める、みなす、仮定する、想定する、想像する、推測する、感じる、気づく、見て取る、意識する、覚悟する、期待する、推定する、解釈する、捉える、判断する、見る、考える、認める、予想する、願う、望む、祈る、意図する、企む、もくろむ、誤解する、勘違いする、思い込む、解釈する、後悔する、心配する

本稿では【表1】の動詞の中でも「AヲB(ダ)トV」構文を取る動詞のみを取り上げる。以下では、それらの動詞を例と共に示す。

- (16)a.花子は太郎を天才だと思った。
b.花子は太郎を天才と思った。
- (17)a.外車を富の象徴だと考えた。
b.外車を富の象徴と考えた。
- (18)a.偽の金を本物だと信じた。
b.偽の金を本物と信じた。
- (19)a.今回の事件を殺人だと判断した。
b.今回の事件を殺人と判断した。
- (20)a.彼の行動を謝罪の表現だと解釈した。
b.彼の行動を謝罪の表現と解釈した。
- (21)a.ハーレムを危険な場所だと意識した。
b.ハーレムを危険な場所と意識した。
- (22)a.科学を人類発展の唯一な道だと捉えた。
b.科学を人類発展の唯一な道と捉えた。
- (23)a.太郎ヲ犯人だと確信した。
b.太郎を犯人と確信した。
- (24)a.会議の時間を8時だと思い込んだ。
b.会議の時間を8時と思い込んだ。
- (25)a.あの男性を女性だと勘違いした。
b.あの男性を女性と勘違いした。

⁴ 仁田(1980)は引用句によって文を埋め込むタイプの動詞を「引用動詞」と呼び、引用動詞を、発話を中心とした「外的な言語活動を表わすもの」と、思考・認識・知覚といった「内的活動を表わすもの」に二分した。本稿では後者の「内的活動を表わすもの」という用語を用いる。

⁵ 研究者によって引用動詞の定義や範囲などについて多様な意見が存在し、その例として提示している動詞の種類も様々である。だが、本稿では引用構文を成す動詞がどのような特性を持っているかを考察することを目的とするため、いくつかの代表的な引用研究で例として挙げられている動詞を合わせ、それについて調べた。

- (26)a.彼の社交辞令を好意だと誤解した。
b.彼の社交辞令を好意と誤解した。
- (27)a.?実証可能なもののみを科学だとみる⁶。
b. 実証可能なもののみを科学とみる。
- (28)a.#母は花子を息子の嫁だと認めた⁷。
b. 母は花子を息子の嫁と認めた。
- (29)a.?一日の消費カロリーを2000kcalだと仮定した。
b.一日の消費カロリーを2000kcalと仮定した。
- (30)a.?参加率を8割だと推測した。
b. 参加率を8割と推測した。
- (31)a.?今月の使用料を約90万円だと推定した。
b. 今月の使用料を約90万円と推定した。
- (32)a.?訪問客を20万人だと予想した。
b. 訪問客を20万人と予想した。
- (33)a.*睡眠時間を8時間だと決めた。
b. 睡眠時間を8時間と決めた。
- (34)a.*読者を消費者だと見なした。
b. 読者を消費者と見なした。

以上の例をみると(16)~(26)の「思う、考える、信じる、判断する、解釈する、意識する、捉える、確信する、思い込む、勘違いする、誤解する」は「AヲBダトV」構文と「AヲBトV」構文の両方に生起可能である。一方、(27)~(34)の「見る、認める、仮定する、推測する、推定する、予想する、決める、見なす」は「AヲBダトV」構文をとらず、「AヲBトV」構文をとることがわかる。さらに、これらの動詞は典型的な引用構文である「AガBダトV」構文にすると許容度が下がる。

- (35)a. 実証可能なもののみを科学とみる。
b.?実証可能なもののみが科学だとみる。
- (36)a. 花子を息子の嫁と認めた。
b.?花子が息子の嫁だと認めた。
- (37)a. 一日の消費カロリーを2000kcalと仮定した。
b.?一日の消費カロリーが2000kcalだと仮定した。

⁶ 「みる」の場合、「タ」形は不自然であるため、「ル」形で示した。

⁷ 「母は花子ヲ嫁だと認めた」は「母は花子ヲ嫁と認めた」の意味とは異なり、「花子と嫁が同一であると認めた」という意味になる。#は文法性には問題ないが、文の意味が変わってしまう文を意味する。

- (38)a.参加率を8割と推測した。
 b.?参加率が8割だと推測した。
- (39)a. 今月の使用料を約90万円と推定した。
 b.?今月の使用料が約90万円だと推定した。
- (40)a. 訪問客を20万人と予想した。
 b.?訪問客が20万人だと予想した。
- (41)a. 睡眠時間を8時間と決めた。
 b.*睡眠時間が8時間だと決めた。
- (42)a. 読者を消費者と見なした。
 b.*読者が消費者だと見なした。

(35)~(42)の例を見ると、「見る、認める、仮定する、推測する、推定する、予想する、決める、見なす」の動詞のとり「AヲBトV」構文は「AヲBダトV」構文とは異なり、典型的な引用文に置き換えられないことがわかる。このことから「AヲBトV」構文を「AヲBダトV」構文、あるいは「AガBダトV」構文から派生されたものと分析するのは説得力に欠けると考えられる。さらに、この考え方を発展させると、「AヲBトV」構文の「ト」は引用助詞ではなく、別の性質を持つものであると仮説を立てることができる。これについては5節で考察する。まず、次節では、「AヲBトV」構文が見せる「AヲBダトV」構文とは異なる文法的な振る舞いについて詳しく検討する。

4. 「AヲBトV」構文の文法的特性 - 「AヲBダトV」構文との相違から -

本節では「AヲBダトV」構文との比較を行い、文法的な面での相違を分析する。まず、文法的な違いとしては「AヲBトV」構文の語順の入れ替え制約や否定のスコープについて検討する。

4.1 語順の入れ替え制約

「AヲBトV」構文は「Aヲ」と「Bト」の語順を入れ替えても、完全に自然な文ではないにしても、「AヲBダトV」構文に比べ、比較的自然に感じる。以下の(43a)~(48a)は「AヲBダトV」の「Aヲ」と「Bダト」の語順を入れ替えた例文⁸で、(43b)~(48b)、(49)~(56)は「AヲBトV」構文の「Aヲ」と「Bト」の語順を入れ替えた例文である。

- (43)a.??1万円だと会費を思った。
 b.?1万円と会費を思った⁹。

⁸ 紙幅の関係上、前節で挙げた動詞の中の一部の例を示した。

⁹ (43b)~(48b)の文の許容度に関しては、自然な文とはいえませんが、(43a)~(48b)に比べ多少許容度が上がる意見が多かった。

- (44)a.??殺人だと今回の事件を判断した。
 b.?殺人と今回の事件を判断した。
- (45)a.??本物だと偽の金を信じた。
 b.?本物と偽の金を信じた。
- (46)a.??謝罪の表現だと彼の行動を解釈した。
 b.?謝罪の表現と彼の行動を解釈した。
- (47)a.??犯人だと太郎ヲ確信した。
 b.?犯人と太郎ヲ確信した。
- (48)a.??8時だと会議の時間を思い込んだ。
 b.?8時と会議の時間を思い込んだ。
- (49)?息子の嫁と花子を認めた。
- (50)?2000kcalと一日の消費カロリーを仮定した。
- (51)?1万円と使用料を推定した。
- (52)?8割と参加率を推測した。
- (53)?20万人と来年の訪問客を予想した。
- (54)?8時間と睡眠時間を決めた。
- (55)??科学と実証可能なもののみをみる。
- (56)??消費者と読者を見なし、戦略を立てた。

以上の例の中で(55)の「みる」、(56)の「見なし」は「AヲBト」構文の語順が決まっており、「BトAヲ」のような語順の入れ替えを許さない。これらの動詞がこのような振る舞いを見せる理由についてはさらなる考察が必要だが、「AヲBダトV」構文にすると許容度が下がる(49)~(54)の「AヲBトV」構文は「AヲBダトV」構文に比べ、「ト」の出現位置が比較的自由である。さらに、元々「AヲBダトV」構文にすると許容度が下がる(49)~(54)だけではなく、「AヲBダトV」構文と「AヲBトV」構文を両方とる(43)~(48)の動詞においても同様な現象が見られる。つまり、同じ動詞であっても「BダトAヲV」の形は非文であるが、「BトAヲV」の形になると許容度がいくらか上がる現象が見られる。このような現象は「AヲBダトV」構文と「AヲBトV」構文を両方取ることが可能な動詞であっても「ダト」と「ト」の振る舞いが異なるということの意味する。本節では「Aヲ」と「Bト」の語順の入れ替えの問題について分析した。次節では否定のスコープの問題に関して論じる。

4.2 否定のスコープ

「AヲBトV」構文は否定のスコープにおいても「AヲBダトV」構文と異なる振る舞いを見せる。以下の(57)~(59)が自然であるのに対し、(60)~(67)は若干落ち着きが

悪いように感じる上に、否定辞のスコープも(57)~(59)とは異なる。

(57)a. 私はこのダイヤモンドを本物だと信じない。

b. 私はこのダイヤモンドを本物と信じない。

(58)a. 私は太郎ヲ馬鹿だと思わない。

b. 私は太郎ヲ馬鹿と思わない。

(59)a. 私は外車を富の象徴だと考えない。

b. 私は外車を富の象徴と考えない。

(60)?投票率を[5割と推測しない]。

(61)?睡眠時間を[8時間と決めない]。

(62)?今月の使用料を[約90万円と推定しない]。

(63)?実証可能なもののみを[科学とみない]。

(64)?花子を息子の[嫁と認めない]。

(65)?訪問客を[20万人と予想しない]。

(66)?読者を[消費者と見なさない]。

(67)?一日の消費カロリーを[2000kcalと仮定しない]。

上記の例文を見ると、(57)~(59)の否定文は否定辞のスコープが文全体にかかっているのに対し、(60)~(67)は否定辞のスコープが「ト」句までしか及ばないことがわかる。これは「AヲBトV」構文の「Aヲ」と「Bト」が同じ節内に存在しないという証拠にもなると思われる。しかし、「思う、考える、信じる」のように「AヲBダトV」構文と「AヲBトV」構文を両方とる動詞の場合には「ダト」と「ト」の否定のスコープの違いが見られない。このような現象の原因についてはまだ明らかになっておらず、更なる考察が必要だと思われる。

以上の現象が「ト」しか取らない(60)~(67)の場合に起こるという事実と、この場合否定のスコープの違いが見られることをあわせて考えると、これらの動詞は3項動詞であり、「Bト」も節ではないことが予想される。しかし、「Bト」が独立した項であることを主張するには、まだ根拠が不十分であるため、今後の分析の可能性として残しておく。

本節では「AヲBダトV」構文とは異なる「AヲBトV」構文の文法的な振る舞いについて考察した。次節では、今までの議論に基づき、「ト」の機能について論じる。

5. 「ト」の機能

5.1 「引用のト」と「引用ではないト」

本節ではここまでの考察結果に基づき、「AヲBダトV」構文と「AヲBトV」構文に

生起する「ト」がそれぞれ異なる意味機能を持つことについて、先行研究を踏まえてより詳しく述べる。

城田(1993)は「ト」の機能について、1次的には副詞助詞、2次的には文法格助詞として働いているとした。城田(1993)によると、副詞助詞である「ト1」は「連れ・相手を表し、用言を修飾する」機能をし、文法格助詞である「ト2」の一次機能は述語転化補語であり、二次機能は様態を表し用言を修飾する副詞格であるという。城田(1993)によると、本稿で扱っている「ト」は文法格助詞である「ト2」に該当する。以下に「ト2」の城田(1993)の例を挙げておく。

(68)a.岡田が大臣トなった。

b.岡田を大臣トした。

c.岡田を大臣ト思う。

d.次の建設計画は市庁ト決まる。

e.先生ト見える/分かる。

(城田(1993:82))

f.名を柿エ門ト改める。(文法格助詞「ト2」の一次機能：述語転化補語表示)

城田(1993)はこれらの「ト」は文法格の「ニ」と同じく、事実ないし想定において「甲は乙ダ」の関係が成り立ち、述語転化補語と思われるとしている。さらに、述語転化補語について「名詞の述語形(名詞+ダ)を文の述語の内容の補充のために取り組む形である」とした。以上をまとめると、「名詞+ダ」を補語にとる場合の「ト」は「ト2」の一次機能である述語転化補語であるということになる。城田(1993)では「ダ」が現れる文と「ダ」が現れない文を区別し、それぞれを受ける「ト」の機能が異なるとは論じられていないが、(68)に対し、「ダ」の省略で「ト」は引用の「ト」と考えてもよいものがあるように見えるが、「大臣となった」、「名を柿エ門ト改める」などの例を引用と考えるには無理があるため、「ト」は「ニ」と同義と考えるのが適当だとしている。これは「ダ」が生起しないほうが自然に感じられる(68a)、(68b)、(68d)、(68e)、(68f)のような文の「ト」を「ダト」と同様に「引用のト」と見るには無理があることを示唆する。この問題を解決するためには、(68)のような文に生起する「ト」を「ニ」と同義の一つ意味に考えるか、あるいは「引用のト」と「引用ではないト(これが「ニ」と同義かどうかは別として)」に二分するかというどちらかの立場を取る必要があると思われる。

さらに、森山(1988)は典型的な引用文と「~ヲ~ト思う」という文の連続性について次のように指摘している。

引用の格成分が、引用成分のなかから抽出される場合がある。すなわち、
Aガ「BハCダ」ト思う(引用型)→AガBヲ「Cダ」ト思う(引用繰り出)

し型)→ A ガ B ヲ C ト 思ウ (同定型) のような書き換えが可能である。同定型では、ト格の意味は、引用と言うべきか同定の「と」と言うべきか、微妙な境界上にある。このような一連の現象を引用成分の繰り出しと呼ぶことにする。(森山 (1988:80))

本稿は、引用構文に現れる「ト」の意味を基本的に連続したものとして捉える森山(1988)と異なり、「A ヲ B ト V」構文に生起する「ト」と「A ヲ B ダト V」構文に生起する「ダト」の「ト」の意味機能を区別して考える必要があると考える。そこで、本節では「A ヲ B ダト V」構文や「A ヲ B ト V」構文に生起する「ト」の意味機能を「引用のト」と「引用ではないト」の二つの機能に分け、さらに、「引用ではないト」は同定の意味機能を持つと考える。

【表2】「ト」の機能

「AヲBトV」構文の「ト」 : 「引用ではないト - 同定」
「AヲBダトV」構文の「ト」: 「引用のト」

以上の【表2】の主張は4節までみてきた次のような事実から導かれたものである。

- I. 「AヲBトV」構文を取る動詞には次のような3つのパターンがある。
 - i) 「AヲBダトV」構文と「AヲBトV」構文を両方取る動詞
(例: 思う、信じる、考えるなど)
 - ii) 「AヲBダトV」構文のみをとる動詞(例: 感情動詞)
 - iii) 「AヲBトV」構文のみをとる動詞(例: 推測する、予想する、決めるなど)
- II. 「Bダト」は「Aヲ」と独立した節を成す。
- III. 「ダト」と「ト」は語順の入れ替え及び、否定のスコープにおいても差が見られる。
- III. I の3つのパターンが存在することやIIの現象から、「ト」は「ダト」から「ダ」が脱落・省略したものとは考えられない。
- IV. 以上をまとめて考えると、節を取る「ト」は引用であり、名詞を取る「ト」は引用ではないということが予測される。

本節ではここまで見てきた「ト」の機能について節を取る「引用のト」、名詞をとる「引用ではないト」について議論をまとめた。しかし、「引用ではないト」は何かという問題が残る。次節ではこの問題について述べる。

5.2 「引用ではないト」: 「同定」

本節では「引用のト」と「同定のト」を区別した上で、「同定」の機能について考

える。以下では「ト」の機能について「具体化」と捉えた先行研究について検討する。

まず、藤田(2000)の「具体化」について述べる。藤田(2000)は次のような例を上げ、「ト」は「具体化」の機能を持つとしている。

(69)彼は、入社以来無遅刻無欠勤と頑張っている。

(70)一家は、全員で十五人と大所帯だ。 (藤田(2000 : 137))

しかし、(69)を(71)のように変えると、(71)は非文になる。

(71)*彼は、休日出勤と頑張っている。

「ト」句が具体化を表わすとすると、(71)のような例も生起可能ながずだが、実際(71)は非文になる。このような(71)の非文法性は「具体化」ではなく、「同定」という考え方をすることで、説明できる。つまり、「無遅刻無欠勤」は「彼」の属性を表わしているため、「頑張っている」の具体化として考えることができるが、(71)の「休日出勤」は人の属性ではなく、勤務体制を表わしており、「同定」としては捉えられないため、(71)は非文になるのだと思われる。さらに、「具体化」では説明できない「ト」には次のようなものがある。

(72)大阪ではバカをアホという。

(73)花子は太郎ヲタッチャンと呼ぶ。

(74)私はこの犬を二郎と名付けた。

(72)~(74)は主体の認識の中で「A=B」という「同定関係」を想定する構文であり、これらの構文の「Bト」を具体化として捉えることはできない。このような「同定」の「ト」の前には「ダ」が現れない。

(72)*大阪ではバカをアホだという。

(73)*花子は太郎ヲタッチャンだと呼ぶ。

(74)*私はこの犬を二郎だと名付けた。

以上、本節では先行研究の「具体化」という捉え方の問題点を指摘し、「引用のト」とは異なる「同定のト」の機能について示した。「同定のト」の前には「ダ」が生起せず、「引用のト」とは異なる性質を持つ。しかし、「引用ではないト=同定のト」と見なすにはまだ根拠が不十分なところが多く、更なる考察が必要であると思われる。この問題については今後の課題としたい。

6.まとめ

本稿では従来引用構文との関連性でよく取り上げられてきた「AヲBトV」構文の「ト」の機能について三つの面から考察を行った。

第一に、「AヲBトV」を取らない感情動詞を用い、「Bダト」は「Bト」とは異なり、「Aヲ」と独立した節をなすことを示した。

第二に、「AヲBトV」構文の文法的な振る舞いについては次の2点について考察した。まず、「AヲBトV」の形を取るが、「AヲBダトV」の形には現れない動詞を調べ、それらの動詞が構成する「AヲBトV」構文の特徴について考察を行った。これらの動詞を見ていくと、「ト」と「ヲ」の語順の入れ替えが「AヲBダトV」構文に比べ、比較的自由であることが分かった。次に、「AヲBトV」構文と「AヲBダトV」構文は否定のスコープにおいても異なる振る舞いを見せることを示した。その結果「AヲBダトVない」は文全体を否定する反面、「AヲBトVない」は「ト」句までしか否定のスコープが及ばないことがわかった。そしてこのような現象を根拠に「AヲBダトV」構文と「AヲBトV」構文の「ト」が異なることを示した。

最後に、「AヲBトV」構文に生起する「ト」は「AヲBダトV」構文の「ト」とは異なる機能を有することについて「AヲBダトV」構文の「ト」は引用の機能を果たし、「AヲBトV」構文の「ト」は同定の機能を果たすと論じた。

このように「AヲBトV」構文は引用構文と密接に関わっている「AヲBダトV」構文と形態的に非常に類似しているが、文法的な振る舞いや「ト」の機能面においても異なる振る舞いをする。

本稿では「ダト」と「ト」の異なる振る舞いを取り上げ、前者は「引用のト」、後者は「引用ではないト」であることを主張したが、この考え方を発展させて「AヲBダトV」構文と「AヲBトV」構文の構文構造がどう異なっているのかという問題にまでは踏み込むことができなかった。また、本稿の考察対象となった動詞は認識動詞が主であったが、今後の研究では代表的な引用動詞とされる発話・伝達動詞が「AヲBトV」構文に生起する場合を含めて論を進める必要があると思われる。

【参考文献】

- 阿部二郎(1999)「いわゆる心内発話について - 発話動詞としてみた「思う」 -」
『筑波応用言語学研究』6、筑波大学。
- 阿部二郎(2004)『現代日本語における引用句の諸相：引用句内の構造を中心に』筑波大学博士(言語学)学位論文。
- 阿部二郎(2010)「日本語におけるいわゆる「例外的格付与構文」の再考 - 語順固定型対格付与構文の提案 -」第7回筑波大学応用言語学研究会。
- 阿部二郎(2011)「「ノコト」の生起したECM構文について」『語学文学』49：11-20、北

海道教育大学院語学文学会.

小野正樹(2005)『日本語態度動詞文の情報構造』ひつじ書房.

片岡喜代子(2006)『日本語否定文の構造：かき混ぜ文と否定呼応表現』くろしお出版.

鎌田修(2000)『日本語の引用』ひつじ書房.

菊池律之(1998)「変化の結果を表わすニ・トについて」『筑波応用言語学研究』5:29-41

筑波大学大学院人文・社会科学研究科応用言語学コース.

菊池律之(2008)「変化動詞文と共起するニ・トに関する考察 - トの意味・機能の分析を中心に -」『日本語文法』8-2: 88-103.

竹沢幸一・John Whitman(1998)『格と語順と統語構造』研究社.

橋本修(1998)「「伝える」「述べる」と「こと」補文・「の」補文の分布」『筑波日本語研究』3:1-8 筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科日本語学研究室.

フォコニエ、ジル(1996)『メンタル・スペース：自然言語理解の認知インターフェイス』坂原茂 [ほか] (共訳) 白水社.

西山佑司 (2003)『日本語の名詞句の意味論と語用論 - 指示的名詞句と非指示的名詞句 -』ひつじ書房.

仁田義雄(1980)『語彙論的統語論』明治書院.

城田俊(1993)「文法格と副詞格」仁田義雄(編)『日本語の格をめぐる』ひつじ書房.

丹羽順子(1994)「副詞的修飾成分「～と」を整理する」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』9:19-28.

藤田保幸(2000)『国語引用構文の研究』和泉書院.

益岡隆志(1987)『命題の文法』くろしお出版.

森山卓郎(1988)『日本語動詞述語文の研究』明治書院.